The Linguistic Society of Japan

Shimotachiuri Ogawa-Higashi, Kamikyo-ku, Kyoto, 602-8048 JAPAN

FAX +81-75-415-3662 E-mail: lsj@nacos.com

日本言語学会『言語研究』編集委員会

2011 年 10 月 26 日

高山林太郎様、

拝啓

時下益々ご清栄のことと拝察申し上げます。

さて、９月末に受領していました下記の論文につきまして審査結果が出ましたので御報告します。

MS11-40　日本語のオノマトペ述語文（フォーラム）

当該分野の専門家お二人に査読を依頼しました。お二人とも意欲的な取り組みを評価されている一方で、先行研究の把握や実証性、論証など、論文の骨格となる部分について重要な問題点を指摘されています（詳しくは次ページ以下をご覧ください）。お二人の間に若干の違いが見られるものの、ともに採用には否定的な評価です。これらのコメントをもとに編集委員会で慎重に検討しました結果、残念ながら今回ご提出の論文は不採用という結論に至りました。

不採用の論文はその後の再投稿を認めないというのが編集委員会の基本方針です。ご期待に添えない結果となりましたが、よろしくご了承下さい。

敬具

『言語研究』編集委員長
窪薗晴夫

MS11-40　日本語のオノマトペ述語文（フォーラム）

第一査読者からのコメント

・言うまでもなく、研究は先行研究の理解を前提とし、言語事実との真摯な向き合いから、そのうえに何らかの修正や発展を加えるものである。扱う現象が大きなものであればあるほど、多くの研究を深く理解する必要があること、また数多くの言語事実の積み重ねによる精緻な論証が必要であることを再確認したい。

・複数の先行研究に批判が加えられているが、どの先行研究についても断片的な理解にとどまっている。

・批判の根拠となる言語事実の提示が不十分であり、説得的とは言えない。主観的な印象が強い。

・批判のための批判にとどまっており、研究史を発展させる方向に貢献するとは残念ながら認められない。

第二査読者からのコメント

重要な問題

１．本論文は、本文の中で参考文献の記述を直接引用しており、引用部分は基本的に「　」で示されているものの、中には一度にかなりの分量が引用されているため、それが筆者自身の主張なのか、それとも参考文献のものなのか、わかりにくく非常に読みづらい。直接の引用であれば、本文と切り離した形式にするべきだし、本文において引用するのであれば、間接的に自身のことばで要領よくコンパクトに記述すべきである。

２．全称命題と述定用法が両立しないことを証明する例として、４ページ１３－１５行目に「雨が降る。／雨は降る。／雨がザーザー。／*雨はザーザー。」「火が燃える。／火は燃える。／火がボーボー。／*火はボーボー。」を挙げているが、以下の理由により、筆者の主張を正当化する根拠にならない。

【理由】

「雨がザーザー。」が適格で「*雨はザーザー。」が不適格なのは、「雨がザーザー降る。」が適格で「*雨はザーザー降る。」が不適格であるためで、筆者の言う全称命題と述定用法が両立しないということではない。つまり、全ての雨が「ザーザー」降るわけではなく、「しょぼしょぼ」降る雨、「しとしと」降る雨、「ぱらぱら」降る雨等々があり、雨を総称して「*雨はザーザー降る。」と言えないからである。したがって、「雨がザーザー。」が適格で「*雨はザーザー。」が不適格なのは、それぞれ適格な「雨がザーザー降る。」と不適格な「*雨はザーザー降る。」から動詞「降る」が省略されて派生したと考えるのが妥当な分析である。このように動詞省略が関わっていると考えれば、なぜ「雨がザーザー。」が適格であるのに対し、「*雨はザーザー。」が不適格であるということが自動的に説明できる。他方、動詞省略が関わっていないとする分析では、「主語＋オノマトペ」表現と「主語＋オノマトペ＋動詞」表現の意味的・文法的類似性が捉えられない。

同様のことが「火がボーボー。」「*火はボーボー。」についても言える。火も雨と同様、「ちょろちょろ。」燃える火のように、全ての火が「ボーボー。」燃えるわけではないので、「火がボーボー燃える。」と言える一方、総称的に「*火はボーボー燃える。」とは言えない。したがって、「火がボーボー。」が適格なのは「火がボーボー燃える。」が適格であり、「*火はボーボー。」が不適格であるのは「*火はボーボー燃える。」が不適格であるためである。この例に関しても、動詞省略が関わっていると考えるべきで、全称命題と述定用法が両立しないということとは全く無関係である。

３．筆者の主張は独自の直感に基づいているが、それが妥当であるかどうか疑問である。例えば、４ページ１行目から５行目にかけて、一時的な「ダイヤモンドがキラキラ光る。」のみならず恒常的な「ダイヤモンドはキラキラ光る。」も可能であると述べ、さらに一時的な「ダイヤモンドがキラキラ。」は自然だが恒常的な「*ダイヤモンドはキラキラ。」は不自然で、全称命題と述定用法は両立しないと述べているが、なぜ「ダイヤモンドがキラキラ。」が可能で、「*ダイヤモンドはキラキラ。」が不自然なのか理解できない。「ダイヤモンドはキラキラ。」も「ダイヤモンドがキラキラ。」と同様可能であると思われ、筆者の直感が果たして正しいかどうか疑わしい。

また、５ページ下から２行目～６ページ２行目にかけて「*地球はクルクル。」は不可能であるが、「地球はクルクルと。」のように、助詞を付けて潜在的に動詞「回る・自転する・公転する」を含意させると途端に恒常的な含意が許容されるようになると述べているが、なぜ助詞「と」が付くと「回る」等の動詞が含意されるのかが理解できない。助詞が伴うか伴わないかに関係なく、動詞が含意され、「地球はクルクル。」も「地球がクルクルと。」と同じように可能であると思われる。

以上のように、筆者の主張は独自の直感に基づいているが、その妥当性は疑問であると思われる。

４.「装定用法」や「述定用法」という術語が使われているが、これらは通常形容詞に使われる用法なので、オノマトペの装定用法や述定用法とはいかなるものか、具体例を挙げてわかりやすく説明すべきである。特に田守・スコウラップ（１９９９）に言及して議論をしているので、それぞれが田守・スコウラップ（１９９９）のどの例に当たるのかといったことを示さなければ、どのような主張をしているのか的確に理解されないと思われる。例えば、２ページ第２段落２行目～３行目において、「裸のオノマトペの述定用法」は動詞等を省略した形であるという前提で田守（１９９９）は書かれているが、単独で安定して現れる以上は「省略」ではないという理屈になると述べているが、「裸のオノマトペの述定用法」がどのようなもので、具体的にどの例を指すのかがわからなければ、安定して現れるかどうか判断する術もないし、そもそも「安定して現れる」ということは一体どういう意味なのか、説明されていないので意味不明である。

上述したように、オノマトペの装定用法と述定用法という術語の定義は明確になされていないが、装定用法は「星がキラキラ輝く。」に見られるように、オノマトペが動詞を修飾する用法で、述定用法は「星がキラキラ。」に見られるように、オノマトペが述語を成す用法であると思われる。この理解が正しいとすると、「裸のオノマトペの述定用法」が単独で安定して現れるということにはならないだろう。「キラキラ」「にこ

にこ」のような具体的描写力のあるオノマトペは述定用法に現れるが、「ゆっくり」「こっそり」といった具体的描写力に乏しいオノマトペは述定用法に現れない。このように、全てのオノマトペが述定用法に現れないので安定して現れるということにはならないだろう。安定して現れるということが別の意味で使っているのであれば、そのことを明確にすべきである。

５．６ページ３節１－３行目で２節の議論を踏まえて田守（１９９９）を見ると、本稿で言う「述定用法」の一部が pp.75-92「引用用法」「文外独立用法」「動詞省略」などと説明されており、どうやらオノマトペは述語にならないという誤った前提に基づいているようであると述べているが、「誤った前提である」となぜ断定できるのか理解に苦しむ。一般にオノマトペは述語にならないと考えられており、オノマトペも述語になれるということを証明してはじめてそのようなことが言えるが、本論文において、説得力のある議論を展開してそのことを立証しているとは言い難い。オノマトペが述語になるかどうかといったことが本論文において極めて重要な課題であるので、「星がキラキラ。」といった表現が「動詞省略」が関与しているのではなく、オノマトペが述語として機能しているオノマトペ述語文であることを証明するために、二つの対立する分析を比較・検討して説得力のある議論を展開すべきである。

例えば、「動詞省略」分析では、「星がキラキラ。」と「星がキラキラ輝く。」が同じ意味を表すと考えられるので、前者が後者から動詞「輝く」を省略して派生したと仮定している。動詞省略が関わっていると仮定する根拠は、この二つの表現の意味的類似性を自動的に説明することができるからである。一方、前者をオノマトペが述語を成すオノマトペ述語文と見なす、本論文の分析では、この二つの表現の関係をどのように捉えているのであろうか。両表現の意味が同じであると考えているのか、それとも異なると考えているのだろうか。いずれにしても、この二つの表現の関係に言及し、その関係について説明する必要がある。

４ページ１行目～６行目において、装定用法ならば一時的な「ダイヤモンドがキラキラ光る。」のみならず恒常的な「ダイヤモンドはキラキラ光る。」も可能であるが、〈状態〉について見ると、一時的な「ダイヤモンドがキラキラ。」は自然だが恒常的な「*ダイヤモンドはキラキラ。」は不自然で、全称命題と述定用法は両立しないと述べている。すなわち、「*ダイヤモンドはキラキラ。」のようなオノマトペ述語文においては恒常的な含意が許容されないと説明している。他方５ページ第３段落３行目～４行目において、「ダイヤモンドはキラキラ光る。」のような装定用法では恒常的な含意も許容されるが、それは動詞に修飾しているからであろうと述べている。以上のように、述定用法と装定用法の相違について述べているが、なぜ述定用法において恒常的な含意が許容されないのか全く説明されていない。

「*ダイヤモンドはキラキラ。」と「ダイヤモンドはキラキラ光る。」の間に、本論文が主張しているような相違はあるとは思わないが、仮に筆者の直感に基づく主張が正しいとしても、「動詞省略」分析でも説明可能である。すなわち、「ダイヤモンドはキラキラ光る。」のようなオノマトペを含む動詞述語文に動詞省略規則を適用する際、当該文に恒常的含意があれば、同規則を適用することはできないといった制約を課せば済むことである。そのようにすれば、「*ダイヤモンドはキラキラ。」のような、筆者が主張する不適格なオノマトペ述語文は派生されない。

いずれにしても、「動詞省略」分析と本論文の分析を比較・検討してもっと説得力のある議論を展開すべきである。

微少な問題

１．３ページ下から３行目において「アリアリ」を一時的〈存在〉を表すオノマトペと見なしているが、「アリアリ」は「有り有り」ないし「在り在り」とも表記されることからわかるように、オノマトペではなく副詞と見なされているので、オノマトペの例としては不適切で、別の適切なオノマトペを挙げるべきである。

また、４ページ１５行目～１６行目に「幽霊がアリアリ。／*幽霊はアリアリ。」を挙げ、前者は適格であるが、後者は不適格であるとの判断を下している。適格と見なしている「幽霊がアリアリ。」も、不適格と判断している「*幽霊はアリアリ。」も一体どのような意味を表すのであろうか。「アリアリ」は広辞苑によると「考えや気持ちなどがはっきりと外に現れているさま」や「現実にないものが目でみるようにはっきりと見えるさま」を表すとあるが、動詞が欠如している「幽霊がアリアリ。」も「*幽霊はアリアリ。」も、幽霊{が／は}アリアリとどうしたの？と聞きたくなり、動詞が伴っていないため、不完全で意味的に不適格な表現であると考えられる。

さらに、５ページ下から２行目～６ページ２行目にかけて「*地球はクルクル。」は不可能であるが、「地球はクルクルと。」のように、助詞を付けて潜在的に動詞「回る・自転する・公転する」を含意させると途端に恒常的な含意が許容されるようになると述べているが、同様のことが「*幽霊はアリアリ。」についても言えるのだろうか。つまり、助詞「と」を付けて「幽霊はアリアリと。」とすれば、恒常的な含意が許容されて適格になるのだろうか。「と」が伴うかどうかに直接関係なく、不適格であると思われる。

２．８ページ８行目～１１行目において、同様の見解は森岡（2001）p.296 にも見られ、「ア・イ・ウは、情態副詞が直ちに動詞に派生して、動詞的性質をもっていることを示している。エは象徴語が特定の動詞と共起する例で、動詞との共起は非常に固く、複数の動詞と共起するにしても同義か意味の関連する場合が多い。『略』」としていると述べているが、参考文献を実際に参照しない限り、ア・イ・ウ・エがそれぞれ何を指すのか全くわからない。参考文献を参照しなくてもわかるように、提示の仕方に工夫が必要である。

３．８ージ５行目から９行目において、「しかしながらこれらの例では「ゆっくり・こっそり」を「遅く・密かに」に換えたところで許容度は同じになる。オノマトペ度がどうこうと言うよりは、「非常に多くの動詞と一緒に起こることができる」とあるように、これらが情態副詞と程度副詞の中間的な意味を有し、叙述性に乏しい為であろう。」と述べているが、田守・スコウラップ（1999）の言うオノマトペ度と語彙性の関係について的確に理解していないようである。田守・スコウラップ（1999:189）は、語彙性とオノマトペ度は正反対の関係にあると仮定しており、「ゆっくり・こっそり」を「遅く・密かに」に換えても許容度は同じになるということは、「ゆっくり・こっそり」が一般語彙に近い、すなわち語彙姓が高いということを示唆しており、「にこにこ」や「ぽきっ」といった具体的な描写力のあるオノマトペと比較すると、オノマトペ度が低い

ということである。

４．１１ページ第２段落７行目～１０行目において、ここで問題にすべきは、「引用」だとか「文外独立」という用語に現れているように、裸のオノマトペで終止する形をまともな文として認めていない点である。本稿の立場からは、叙述性が強いものについては「引用文・文外独立文」の述語となっていると考えると述べているが、形式に関係なく叙述性が強ければ述語と見なす考え方は乱暴な議論である。

５．些細なことであるが、参照文献として田守育啓とローレンス・スコウラップ（1999）の共著書『オノマトペ―形態と意味―』を挙げているが、本文では一貫して田守（1999）となっている。共著であるので、田守・スコウラップ（1999）とすべきである。代表させて田守（1999）とするのであれば、そのように断るべきである。

以上.